

アストラジンガ人相拝見

ア ド ウ ン
細 谷 章 夫 共訳

(まえがき)

「アストラジンガ人相拝見」の原名はスンダ語で Astrajingga Didukukeun で、アストラジンガ（人形劇中ではいつも道化役として登場する人物の名前）の人相を占うこと、あるいは人相見に見てもらふことを意味する。話の前半はアストラジンガが二人の女房に逃げられ、あちこち探して歩き、友人と話しこむところ〔第一話〕〔第二話〕。後半が〔第三話〕で、アストラジンガの若い妻イジュムが人相占のところに行き、自分の主人の年老いた妻イマスを離婚してくれるよう、頼みにいくところ。これが演題の由来。そこへ年老いた妻イマスがやってくる。イジュムは隠れる。イマスは人相見に、以前頼んだことを実行して欲しいとせまる。つまり、主人が自分と若い妻を公平にとり扱うよう、祈ってくれという。結局隠れていたイジュムは声をあげてしまう。さて、それからは……というところ。しかし、その筋が重要なのではない。その間におこなわれる話のやりとり、言葉の遊び、そこに話芸の本領が発揮される。語り手はアセップ・スナンダール Asep Sunandar。イジュム役はアセップ・タルナ Asep Taruna である。二人のダラーン（語り手）によるやりとりは絶妙。話芸の伝統を思わせる。しかし通常のスンダ地方の人形劇 Wayan Golék（木製の人形を使つての人形劇）では、ダラーンは一人。すべての登場人物の役をこなす。しかしも合の手、足で小型の金属板を鳴らし、左手で小さなスリコギ状の棒をもち、かたわらにある木箱をたたき、右手で人形を操作する。したがって、人形劇におけるダラーンの役割はもっとも重要である。もちろんダラーンの背後には、歌い手の女性が二名（スンダ地方）、そしてそれを取り巻くように、楽器と演奏者が並ぶ。この演奏者たちはスンダ地方では、出演中に黙ってはいない。ダラーンが語る会話に、音楽を演奏しながら、野次を入れ、笑い、冷やかす、ちゃちゃを入れる。ダラーンも負けずにその連中に文句をいったりして、舞台を盛りあげる。本文中にも、演奏者にむかって、「私を見ながら、山（歌い手の乳房のこと）を眺める」というのも、その辺の事情を物語っている。

これはテープのための「語りもの」なのか、もともと上演されていた「語りもの」をテープにしたのかは不明。これは通常の物語劇である Wayan Golék とは異なり、お笑いのための人形劇で、Wayan Bodoran というらしい。このテープを私は1993年夏のインドネシア訪問のさいに購入した。帰国が9月上旬。当時アドウン氏（パジャジャラン大学）が日本滞在中で、このテープを聞いてもらい、スンダ人のユーモアを理解するうえで、よい資料になると判断、二人で翻訳をはじめた。しかしそのとき、すでにアドウン氏は帰国間近で忙しかったことと翻訳のむずかしさなどで、時間をかけたわりに訳業を完成することはできなかった。1994年8月中旬から一カ月、再度インドネシアに渡った私は、一つの仕事としてこの翻訳の完成を考えていた。予定どおり、アドウン氏と何度も会い、ようやく完成し、共訳との許可を得て帰国した。

私の当初の考えでは、スンダ人のユーモアを理解する一つの資料として利用を考えていた。その他「笑い話」を収集することを、アグス氏（パジャジャラン大学）に計って協力の同意をえていた。結

果的には、他のもう一つの仕事に手いっぱいとなり、それを達成できなかった。そのためこの資料は、ずっと放置されたままになっていたが、このまま捨ててしまうのは惜しいとの気持ちから今回発表することにした。というのは、ところどころスダ人の風俗なり、習慣なりをうかがわせるものがあり、変化の激しい現在のインドネシアの状況では、やや古くなってしまったものもあるが、書き残しておくのもよいと思われたからである。またユーモアというより、いわゆる「しもネタ」の箇所があるが、まあ、これは健康な笑いとして読み飛ばしていただきたい。本来、語りもので、その語りの面白さを味わうべきもの。文章にしてはその魅力は半減する。それを承知でお読みいただきたい。

最後に「共訳」とした理由を述べておく。テープはスダ語で語られており、アドウン氏と私はテープを何度も巻き戻しては再生し、アドウン氏に意味をきき、私がより適切と思われる日本語で書き取ったものである。だがけして仕事が順調にいったわけではない。ある場合には一語一語の意味を私が問いただし、そして全体の意味と文脈から、私が日本語の文章に言い換え、アドウン氏がそれに同意する、といった仕方で出来あがった部分が少なくない。私が翻訳として出すのを躊躇した理由の一つである。私は全くスダ語を理解せず、スダ語と日本語によく精通する人に、もう一度読んでもらいたいとの気持ちがあった。しかし部分的な誤りはあるかもしれぬが、一応しつこいほどアドウン氏に聞きただし、全体としての意味をほぼ把握したとの気持ちもあり、発表に踏切った次第である。したがって、もう誤りがありば、その責任は私にもある。その意味で共訳とさせていただいた。この訳業のため、アドウン氏の疲労は相当なものであった。限りある時間のなかで、つらい仕事に最後までつきあってくれたアドウン氏に、あらためて感謝申しあげたい。(細谷)

Dukun 人相見

前口上 [第1話]

ジャワ語とインド語と混ぜてのあいさつ。 (省略)

これからアストラジンガ Astrajingga の活躍が始まります。

あちこち自分の奥さんをさがしているところ。最初の女房も、二番目の女房も2人ともいなくなる。アストラジンガはどこへいったのかさがしています。

アストラジンガは友だちにいう「私の女房がいなくなった。」「もう何日もいないのか。」友だちがきく「一人はもう一週間いない。」「兄さん(Aをさしている)奥さんは何人いますか。」「2人だよ、イマス Imas (よい人の意味)とイジュム Ijem (あまりよくない名、ユーモアの好きな人、気狂の意あり)さ。」

友人「やっぱり兄さんはぜいたくですね。」

A 「いまは離婚しようと思っても、それは罪づくりだからなあ。」

友人「兄さん、進退きわまっているんですね。でも2人の奥さんをもつということは進んでる証拠ですよ。」

A 「盲人の人だけが、ただ1人の奥さんをもつものでして、目の覚めている人なら…。」

友人「それが業というものですよ。」

A 「もう(女房どもを)放っておいてもいい、私は女どもを残して、天国へ行きます。」

[音 楽]

[第 2 話]

音楽が終わったら、またお祝いの言葉をいわなければならないなあ（ダラーンの一人ごと。本来きまり文句をいうところ。しかしリズムにあわせて自由な文句をいっていいところ）。これから後家さんでもさがしに行こうか。

（それに対して）「兄さん、どうしてきまり言葉を破って、そんなことをいうのですか。チャントやって下さいよ。」

規則をやぶってしまった。でも放っておいて。規則以外のことは、カットされても仕方がない。大事なことは満足すること。

ぼくは土産をもらって帰るダラーン（ワヤンの語り手のこと）。ぼくはえらいダラーンじゃあない。大事なものは食事、家内と子供を食べさせること。田畑を買うこと、車を買うこと、そして、自分の子供を学校に行かせること。規則を守りながら、うれないでいる連中はやきもちをやき、いじめて、いじわるして、いやがらせして、ひじでおしのけ、唯我独尊、そして自慢たらたら。そのことは絶対に正しくない。一番大切なことは、生活している基礎に私たちは祈りの気持ちをもつこと。なぜならば、地球上にいるかぎり、祈りの気持ちをもたなければならないのですから。実はアラーの神様は人間と善霊とをお作りになり、人間と善霊はアラーの神をただ祈らなければならないように作りました。だから今、一番大事なことは祈り。私たちは今、世界の中で暮らしているのですから。

A「私は今、となり組の長に選ばれました。」

他の人「どこのとなり組ですか。」「となり組の長になっても、お兄さんは奥さんが2人いるから駄目だよ。」

A「PP.10があるからね。」（PP.10とは、Peraturan - 規則 Pemerintah - 政府、政府規則10号のこと。政府は毎年必要に応じて規則を発令する。PP.10とはある年の10番目に出された規則のこと。その10号とは、公務員は1人の妻だけを持つこと。但し、以下の条件により2人の妻を持つことができるとの規則あり。以下の条件とは、今の妻が、十分に妻としての役割を果たしていない〔たとえば、病気、体が十分でない〕場合、また奥さんの許可を得た場合）

A「2人の奥さんはいけないなあ、でもいけないのは表向き。裏では奥さんが2人いて、また、愛人がいるのは普通のこと。そのことはただ、それぞれの男の欲。実は私たちはみんな、死ななければならないことを自覚していない。そしてそれで私はとなり組の長に選ばれたけれどお断りしました。」

他の人「何故、断ったのですか。」

A「私は不信心なのだから、指導者になるよりもお祈りしたほうがよい。私はていねいにお断りします。不信心でしかも指導者になるのは絶対にいやなこと。なぜなら、不信心でありながら指導者でもあったら、幸せや信心においてよい結果にはならない。不信心

な指導者があつたら、アラーの神様にひどくおこられる結果になるはずです。」

友人たち「それは正しい。すばらしい。」(と異口同音にいう)

A「えっ、私をのぞき見している人がいるとは思わなかった。私の考えでは、ここに立っているものは幽霊とばかりと思った。」

他「ああ、ここではアデ・チトラという人もいるよ。」

A「その縞模様は虎と思ったが、シャツの色ですね。」

他「やはり、いろいろな色がありますからね。」

A「そうそう、実は私はあちこちに行くのは、家内をさがしているからです。2人ともいなくなってしまったから。」

他(よその人)「もう何日いないのですか。」

A「私は、家内が逃げてもかまわない。私は、ばあさんたちにはまだもてる。そうですね。そうそう私のばあさんは亡くなった。でもばあさんの頭がブルドーザーにやられただけ。この世界はいつつぶれるのか。」

他「それは、悪いお祈りですよ。一番大事なのは、奥さんをさがしてください。」

A「ああ、それは私の責任じゃない。」

他「ああ、お兄さんは、まだもてるからねえ。」

A「違います。ダナさん。あなたも私たちとおしゃべりしましょうか。」

「ぼくは自由にくらしています。人間は先生次第で生きるからね。ぼくの先生は、もうお年寄りだよ。」

他「どこの人？」

A「チブル出身の人です。」

他「だあれ。」

A「ミンタ(よくある名前)じいさんですよ。ぼくの助平方面の先生はチアミス出身のダナセティア先生ですよ。」[現在バンドン地区の教育委員長、幼稚園から高校までの権限を持つ]

他「兄さんは先生が多いですねえ、その先生たちにそっくりですね。」

A「それからパンジャール(Panjalu)出身のムム先生。ぼくはレデロシダさんを思い出す。彼はムム先生というときには、彼の唇は7メートルも伸びる。(ムムの発音のとき、唇をひどくとがらせることを誇張して表現)」

他「兄さん、アセプ・ソパンディさんについてどう思いますか。」

A「アセプ・ソパンディは不倶戴天の敵です。マジヤラヤ出身の運転手のエンディさんはぼくの恋がたきです。ユースさんも同じですよ。ああ、もう家内をさがさなくてもいいよ。」

他「えっ、兄さんそれはいけないよ。」

A「ぼくの家内には愛想がついた。」

他「なぜ、奥さんに愛想がつきたのですか。」

A「イマス（妻の名）は片方のほほがふくれている、イジュム（もう一人の妻の名）は、また出っ歯で、唇がめくれている。目が小さくて、こうもりみたいな奴だ。」

他「兄さん、もういい加減にして、いじめるのはやめてください。それはタブーです。」

A「ハンサムな男と美人が結婚すれば、お似合いの瓜二つ。けれどもイジュムとエオンが結婚したら、やもりといもりのカップルだ。おまえはやもりと同じ。おまえ（他の人に向かつて）はおばけ、おまえ（楽器の演奏者に対して）は私を見ながら、山を眺める（歌を歌う人の乳房を意味する）。イインさんに聞いて下さい。あと何分ですか。」

他「あと13分です。」

A「イインを分割すると、イは Idul Fitri（回教暦10月1日。断食あけと同じ）、インは Indonesia。だから、インドネシアでは Idul Fitri をしなければならない。つまり、イドル・フィットリごとに私たちは、合同祈とうにしなければならぬ。イインという名前は、ブギス民族（南スラベシの民族）の名前です。」

他「バリの人だったらどうですか。」

A「バリの人によると、ウウン（Uun）ですよ。」

他「ジャカルタの人によると何といいますか。」

A「ジャカルタの人々によると、エエン（Een）。」

他「スンダ民族によるとどうなりますか。」

A「スンダはアアン（Aan）。」

他「ジャワ民族のときはどうですか。」

「ジャワ民族は Dedemit（おばけ、幽霊の意味）。」（笑）、（実はジャワ人の癖からいえば Oon というべきところを、Dedemit といって笑わせる）

A「今、ザイという人がいないなあ。よかった。（ザイがいると怒るから。多分、ザイはジャワの人）。」

他「エイエ（Eye）という人だったら、どうですか。」

A「Eye はジャカルタの人の言い方だよ。」

他「ブギスの人ではどうですか。」

A「ブギスの人によると、イーイエ（Iyi）。」

他「バリ民族によるとどうですか。」

A「ウユユ（Uyu）。」

他「スンダ民族だったらどうですか。」

A「アヤア（Aya）。」

他「ジャワ民族ではどうですか。」

A「ウーウエ（Euweuh スンダのらんぼうな語で、いない、ないの意味）。」（笑）

他「兄さんはなんでもよくできますねえ。」

A「ぼくは上手さ。」

他「兄さん、どこの学校を出られたのですか。」

A「大学だよ。」

他「兄さん、正直に言って。」

A「迷路大学さ。」(迷路大学のもとの語は Langlang Lingling で、もとの意は迷路のこと、この語は同時に Langlang [行ったり来たりすること] Buana [地球, 世界の意] という、バンドンにある私立大学〔国際交流大学〕にひっかけたと思われる。この経営者は西ジャワ出身の警察関係者といわれている。)

他「兄さん、略語が [大学で] よくわかりましたか。」

A「それは大学だったらあたりまえだよ。小学校でも習いましたよ。」

他「兄さん、本当ですか。これから質問しますから教えてください。」

A「はい。」

他「クイズだよ、兄さん準備してください。ディディ (Dedi) 君、鐘を鳴らしてください。」

他「第1問、陸軍の略語はなあに？」(Angkatan (グループ, 組, 世代などの意) Darat (陸の) = 略語は AD)

A「AD だよ。」

他「正解です。次、いいですか。」

他「空軍 Angkatan Udara (空の, 気温の意) の略語はなんですか。」

A「AU」

他「正解, 州 Kantor (オフィス) Departemen (省) の略語はなんですか。」

(中央の出先機関の1つ, インドネシアは大体, 西部インドネシア, 中部インドネシア, 東部インドネシアの3つの州官庁があるとみてよい。鉄道などは7つぐらいに分けられる)

A「KANDEP だよ。」

他「正解, 100点あげましょう。さあ, 次はいいですか。」

他「Kantor Wilayah (KANDEP の下部機関で, 郡, 市にそれぞれ所在する)」

A「KANWIL」

他「正解, 兄さんもう1つ, Kantor Jutawan。」(Kantor Jutawan などという官庁はない。Jutawan は, 百万長者。100万 Satu Juta からきた語) の意。

A「KANJUT (これはスダ語で, ペニスではなく「睾丸」を意味する) エッ, あんたはいじわるしたね。神様, 許してください。私は本当に恥ずかしい。馬鹿, ぼくはハデイ Hadi 兄さんに恥ずかしいよ。」

他「兄さん, いいえ, 兄さんが上手だから, 私は質問しただけ。」

A「馬鹿, ぼくは, こんなことを言ってしまった。」

他「さっきのことを聞くだけ。Kantor Departemen は。」

A 「KANDEP。」

他 「Kantor Wilayah は？」

A 「KANWIL。」

他 「Kantor Jutawan は？」

A 「KUNDANG。」(笑) (A は KANJUT という語がいえないので、Kanjut Kundang のという語の後半をいったわけ。ところで「Kanjut Kundang」とはスンダの人々の習慣にヘソの緒を乾燥させ、紙袋にイモ、葉、硬貨と共にに入れて、赤ん坊の枕元に3カ月間ほど置く習慣がある。そのヘソの緒を入れた紙袋を Kanjut Kundang という。これはヘソの緒が赤ちゃんのもう一つの生命体と考えられ、それを置くことは赤ちゃんの安全のために必要と考えられている。そののちは大切に保存される。なお誕生の際の胎盤 [Bali という] は長命を祈って川に流すか、竹筒に入れられ、庭のすみ、あるいは土台下に埋められる。)

A 「放っというて、放っというて、地球の上で生活するのに一番大事なものは、ただお金。」

他 「兄さん、奥さんを捜してください。」

A 「エッ、家内を捜すんだって、放っというてくれ。死んでもかまわない。アセップ・タルナ Asep Taruna も (ダラーンである Asep Sunandar の兄弟弟子で、相棒の友達の名) 私に助言するが、放っというてくれ。ぼくの家内と会ったら、なにもいわないでくれ。彼女は出ていく前に夫に、なにもいわなかったのだから。つまり、女が家を出ていく前に夫に何もいわないのは、一番悪い女。どこへいったのかわからない。」

他 「でも兄さんはただ自分の奥さんを罰するだけではいけませんよ。自分自身反省しなければいけません。」

A 「ぼくもそのことはよくわかるよ。ところで話がかわるけど、掃除を私たちは一緒にやらなければならないよ。」

他 「兄さん、それはあたりまえ。」

A 「きれいにしておくことはものの気 (Kasetanan) がつくことの原因だから、あつ、失礼、健康 (Kasehatan) のもとだから。健康というのは、IMAN (宗教の基本的な信条、イスラムの場合には6つある) の1つ。だから、TIBMANTRA をやらなければならない。」(これは略語、もとの西ジャワの知事 (現在内務大臣) の政策。TIB - Ketertiban 整理整頓。MAN - Keamanan 平安, 平和。TRA - Kesejahteraan 豊か, 栄える, 繁栄)

他 「兄さん、TIBMANTRA のもとの意味はなんですか。」

A 「Katartiban, Kaamanan Kesejahteraan ですよ。」(これらはそれぞれ Ketertiban, Keamanan, Kesejahteraan のスンダなまりの表現。意味は同じ。)

他 「お兄さんはすばらしいですね。」

A 「私たちはよい国民として、規律を守らなければならない。そういうことだよ。それ以

上にわれわれは夜間に、近所を巡回するのはそれはよいこと。」(夜の巡回は Ronda Malan。村の場合には19:30(イスラムの5回目の祈りが終わったとき)から翌朝4:00[朝の祈りの始まる前]まで。市の地区などでは国営テレビ終了後の夜中[零時]から翌朝の4:00まで。4人~10人のグループが見張りながら歩く。また3,000ルピアを支払い当番を休むこともできる。昔は村では、Kentongan という竹をもって打ちながら歩く。今は灯りを照らして泥棒よけとする。)

A「なぜなら、悪事が多いから、チャント私たちが見はらなければならない。昔の戦争は命をささげるまでやりました。そのときには、人々は精神(心)が肉体から別れてもかまわないと思いました。今はただ独立を維持するために、戦争を続けなければならないからです。政府は毎年、[独立のために]闘った祖先を思い出すために行事を行う。しかし私は恥ずかしい。(自分の国のために役立っていないので、の意)」

A「私たちは功績があって、しかも停年になった人を思い起こさなければいけません。実は停年になった人々の多くは駐車場係になっていますし、なお苦勞している人々もいます。だからこれから、コサンビ市場 Pasar Kosambi にいるパン焼きのアマ Ama さん(メッカに行って、Haji となる=H・Ama 今のアマさんの店の名は SARI RASA)のところに行きましょう。そこでかつてのベテランたちの力が活用されます。やはりアマさんは必要だよ。停年になった人に、まだ割礼していない子供がいたならば、そして経済的に貧しいながら音楽をやっている人々(ダラーンの背後にいる演奏者たちをさす)の子供も、アマさんにつれて行ってください。音楽をやっている人々に子供があったら、ダラーンのところにつれて行ってください。あなたたちは自分のお金で、自分の子供を割礼することができなかつたら、私はその子供をなぐります。」

他「兄さん、兄さんは奥さんに取り残されたから、うるさくなりましたねえ、早く奥さんを捜してください。」

A「イイン君は、私に7の合図をあげて、3つの指を折り曲げる。それは73かなあ。」(これは宝くじのことをいっている。宝くじに2種ある。第1種類は日本と同じ宝くじ方式で、番号記入のものを1枚5,000ルピアで購入する[クーポンA]。1等は10億ルピア[約5千万円]になるという。第2種類のは、自分で番号を記入し、それを当選発表前に売り場に申請し、その半券を持ち、当選番号と照合することになる。それには下4桁を当てるもの[クーポンB]、下3桁を当てるもの[クーポンC]、下2桁を当てるもの[クーポンD]とにわけられる。これらの1枚の価格は市内では1,500ルピア、市外では1,000ルピアであるという。ここで話題になっているのは下2桁、すなわちクーポンDのこと。しかし1993年11月30日をもって、宝くじの販売は結果的に若者の風紀をみだすとの世論[とくにイスラム教徒たち]の反対におされ、中止された。)

他「兄さんは、奥さんがいないのに、楽しそうですね。」

A「いま、ほかの人は番号をさがすのに苦勞しています。たとえば、大きい木の下とか、

大きい石のあたりで、断食しながら祈っている（宝くじに当たるように）。集まってくる蚊に刺されながら、そのことを我慢している。精神（心）を蚊に、夜の風にささげながら、寝ずに、しかもそれは一晩や二晩ではなく、番号をさがすのに一週間もかけて、わからないことを追いかける。

彼自身が自分自身を大切にしないと、他人はもっと彼を大切にしない。そういう人は一番 [自分自身に] 不忠実です。やはり、一番不忠実な人は自分自身を大切にしなかった人です。だます人でも他の人にだまされるのをいやがります。その意味は、自分自身を大切にしているからです。それからどろぼうも他人のものを盗んで、自分の子供を学校に行かせます。それはまだ愛情があることを意味します。すなわち、一番不忠実な人は自分自身を大切にしなかった人です。自分自身を大切にしない人がどうして他の人を愛したりすることができるのでしょうか。

これから大きな木の下に寝ころぶよりも、私たちの力は、ゴトン・ロヨン（相互扶助）でいっしょうけんめいやって、[ここからインドネシア語、スハルト大統領の口調をまねる] (Dilaksanakan「行わなければならない」と発する)『政府がプログラムしたことをよくおこなわなければならない。そして規律を守りながら、私たちはどのようにして飛躍することができるか。』

基本的に成功して、建設が進められ、現実にもいいと感じ、民間は悩まず、国が安泰で、政府はしあわせな民間をみて喜び、嘘をつかない政府があったらもっといいでしょう。そうしたら、私たちは楽でしょうね。なぜなら、政治家が自分自身を大切にするだけで、民間に損害を与える。それは政治家ではない。彼は自分の約束を守らず、すなわち、民間と国を愛することをしない、それは政治屋 Oknum です。(自分の利益だけで行動する人をいうらしい)

他「兄さん、私たちは民間人として、そのように上の人 [政治屋のこと] に対して悪口をいってはいけません。けれども私たちは、どうしたらいいのでしょうか。」

A「やはり、私たちは民間人として、政府を助けてあげて、民間人として自覚をもって、そんな悪いことをした人をさがし、みつけたらそれに関連した官庁に報告します。」

他「兄さん、一般的知識が素晴らしい。」

A「一般的な (umum) 知識があったら、自分の心を明るくすることができます。そして同じだったら (私の書いた宝くじの番号と、政府の出した当選番号とが同じだったら、つまり当たったの意味、アストラジンガ Astrajingg がワヤンで活躍するのは23:00時頃。また宝くじの当選が発表されるのも23:00時頃である) あと3分間でもらえる。これから行きます。」(A 退場)

[音 楽]

〔第3話〕 人相見

人相見「かみ煙草がどこにあるかなあ。やっぱり、こっちだ。」

他「じいさん（人相見に対して）まだかみ煙草をやっているんですか。」

人「このゴキブリめ！ エイツ（殺そうとしながら）また皿にとんだな。このゴキブリはほんとうにうるさい奴だ。馬鹿やろうめ。気違いめ、馬鹿！」

他「なんですか、なんですか？」

人「ゴキブリかと思った。」

他「実はなんですか。」

人「爆弾だ。ばけものめ。昔の私の使った手投げ弾でやっつけてやる。」

他「じいさん、ほんとうに闘ったことがありますか。」

人「ほんとだよ、ぼくの背中にある傷を見てくださいよ。」

他「なんの傷ですか。」

人「しっしんの傷だ。」

他「ああなるほど、私は鉄砲傷かと思った。」

人「むこうの奥さんの御主人のアヤト君と同じだよ。」

他「どこのひとですか。」

人「ランチャマヌク（Rancamanuk）の人ですよ。彼はハジダフランとエエンの子供です。」

他「エエンさんとはどなたですか。」

人「エエンとはカムラン（Kamurang）の人で、実はがまんして結婚生活をしています。

御主人〔ハジダフランのこと〕は汗をかくとかゆくなる病気になっています。神様お許してください。」

他「じいさん。」

人「なんだね。」

他「チョット聞きたいことがあります。」

人「なんですか。」

他「私に大財産を下さい（宝くじの当選番号を教えてくださいの意味）。」

人「番号ですか。」

他「じいさん、そうです。もう当たり番号がわかりましたか。」

人「昨日、よそのひとに教えてしまいました。」

他「誰に教えたのですか。」

人「ここに来ていて、番号を頼んだ人に教えました。」

他「ここに来た人は誰ですか。」

人「わからないけれども、腹のでっぱった男の人で、話によると手術をしたことがあって、腹の中に泡ばかりが入っているとのこと。ほんとうですよ。」〔トントントンと戸をたたく音〕

人「ああお客さんがきた。」[ドンドン戸がたたかれる]

人「そんなにひどく戸をたたいて、失礼な、田舎者め。」

他「いまにもドアがこわれそうだ。」

人「イスラム教の人ではないらしい。(イスラム教の信者だったら、訪問するときに、[幸福と安寧を与えたまえ]と、アラビア語でいう)」

他「じいさん、それはなんですか。アッサラム、アライクム。」(相手に良いことがあるように祈る言葉)

人「ああなるほど、訪問するときにはアッサラム、アライクムを言わなければならないですねえ。」

女の人「ワアライクム、サラム。」(みなさんもよいことがあるようにと祈る、返事の言葉)

人「ああお客さんがきました。」

女の人「エッ、ごめん下さいませ。」

人「アッサラム アライクム。」

女の人(外で)「ワアライクム ランサム。」(ワアライクム、サラムというべきところをランサムと誤っている)

人「この人はおかしい人だ。」

他「じいさん、それはお金になるよ。」

人「神様が一番強い、でもそいつは女だなあ。」

女の人「とうさん、アッサラム アライクム。」

人「お嬢さん、アライクム サラム。」

女の人「おとうさんはどこにおられるのですか。」

人「ぼくは山の頂上にいる。こいつは変な奴だ。ぼくのいるところを聞くのだから。」

女の人「私は外に、おとうさんは中にいますか。」

人「ほんとうにこのひとは気狂いだなあ。」

他「じいさん、チョット、気が狂っているね。」

人「そして声が小さいですねえ、お嬢さん、こっちへおいでなさい。」

女の人「ごめん下さい。」(入ってくる)

人「はい、床におすわりなさい。でも皿の上に座らないでください。」

女の人「とうさんは皿をあちこち散らかしているから。」

人「それは私が KTP (身分証明書の意あり) を買って食べた皿ですよ。」

女の人「KTP。」

人「ほんとうだよ。それは塩からくて、すりつぶした野菜からできた食べ物だよ。」

女の人「それは Bala-Bala (お好み焼きのようなもの、ただしダンゴ状にして油で揚げたもの)ですよ。」

人「どっちでもいいよ。」

女の人「この人は人相見さんですか。ここは人相見さんの家なんじゃないのですか。」

人「はい、ここは拙者の家だ。」

女の人「なんというじいさんですか。」

人「名前がない。」

女の人「それは Murtad (アラビア語 規則, 規律を守らない, ナラズモノ的な意味もあり) じいさんじゃないですか。」

他「エムス Emus (この人相見の名前) じいさん。」

「エムス Emus じいさんもククル Kufur (イスラムの規則など無視して勝手なことをする, 極悪人) じいさんもあなた次第ですよ。お嬢さんの名前はなんですか。」

女の人「じいさん, 私の名前は外国の人にも知られています。」

人「有名なんだなあ。」

女の人「ハイ。」

人「かみなりのごとく……………」(鳴りひびいているというところを切られる)

女の人「かみなりのごとく光り輝いています。」(光陰鉄砲のごとしのように間違える)

人「おまえは大変な奴だ。男なのかね, 女なのかね。」

女の人「じいさん, 私はバドット Badot (臭いもの, 水浴しないことをも意味する) です。」

人「おお神様, お許してください。」

女の人「じいさんは私のことが見えないのですか。」

人「おまえはずいぶんひどいことをいうね。あなたの指は私の顔を突き刺すほどだよ。」

女の人「私はあなたのような年輩の人が嫌いです。もしほかの人に尊敬されたかったら, あなたも人を尊敬しなければいけません。」

人「おまえはここに来たのは私をおこらせるために来たのですか, それとも御用なのですか。」

女の人「用事があってきたのです。私はじいさんの家に来たのは, よその人によると, ここに人相見がいると聞いたからです。」

人「お嬢さん, 人相見は私ですよ。」

女の人「あなたの祈りはよく当たるのですか。」

人「それはあとのこと。おまえがいったとおり, よく当たるかどうか, 先にやってみなければわからない。当たるかどうか, 私の問題じゃない。」

女の人「当たる可能性がなかったら, 私はここに来たのは無駄になります。もし出来たら, つまり私の望むことが達せられたら, 私はじいさんを信用しましょう。」

人「大事なものは当たるかどうか, それはお金だよ。私がお金を見たら, 必ず一生懸命祈ります。」

女の人「人相見はそんなことをいわないでください。お金はいくらでも私の心次第で, 今

度差し上げます。この人相見はお金によって、お祈りするんですね。」

人「放っといってください。お金のことはほんとうのことだ。(おこりながら) おまえさんはツバが出るほどしゃべりました。それはよくない。」

女の人「それは当たり前です。ひさしがないのですから。」

人「おまえは馬鹿です。雨と同じように口から泡をとばすのは。もっとひどいのは、くさい。」

女の人「まさか、じいさん、実はこういう話があります。」

人「ハイ、どういう話ですか。」

女の人「私がここに来たのは、ひとの話によって……………」

人「行くことは無駄なことではない。」(「行くのは目的があるから」がこの慣用句に続くのを女の人がさえぎって)

女の人「行くのはおしゃべりしたいから。」

人「(いつかどこかで誰かから聞いたような、との意味で) 風の便りに……………」(というのをさえぎって)

女の人「イボの便りに……………」

人「神様お許してください。稲づまのような早さで……………」(というのをさえぎって)

女の人「小さいイボのような早さで……………」

人「おまえは小さいイボといったなあ。」

女の人「他の人にならないというのですか。それはダラーンのいったことですよ。」

人「正しいのは、風の便りに聞いたものが、稲づまのような早さで広がる、だよ。」

女の人「じいさん、私は雷と一緒になどいやなことですよ。」

人「おまえの御主人はさぞ大変だろう。おまえの唇の色はチョコレート色だから。」

女の人「私がそめたのだと思いますか。」

人「そうだと思うよ。そしておまえは黒くてゴツゴツやせている。」

女の人「じいさん、それはじいさんがそう思っているだけ。私の主人は愛しているから美人だと思っています。」

人「ああそれは無理しているんだろう。」

女の人「私は主人がいます。」

人「それから？」

女の人「私の主人は二人、数えまちがった、42。」(二人といったのは本当の主人以外にもう一人いること。よく考えてみると42人の主人ともいべき男がいることを意味する。それが宝くじの番号への連想となっていく)

人「神様お許してください。おまえは私に番号をくれたら、私は買うために遠くシンガポールまで行かなくてはならない。おまえの御主人は二人妻ですね。」

女の人「ええ、二人妻です。42の番号が当たりますようにもう決めました。出るのは42。」

人「6はたした数だよ。なるほどおまえの御主人は妻が二人いますねえ。」

女の人「はい、そうです。買い物も、なんでも二つに分けました。」

人「おまえは主人が二人いるんですか？」

女の人「私は四人います。」

人「おまえは色ごのみだから、御主人が妻二人もつのはあたりまえ。」

女の人「淋しいから男がいないと……………」

人「馬鹿だよ、淋しいことはわかりきったことなのに。男がいないときにすりこぎにとうがらしをぬりつけて、耳に入れてください。そうしたら、おまえの耳がつんぼになるでしょう。(ここで耳とっているのは実際には女陰を暗示している)」

女の人「じいさん、私は困りました。主人はチョット若い妻のところへ行ったり、年をとっている妻のところへ行ったりしますから。」

人「お前は若い妻ですか、年をとった妻ですか？」

女の人「私は若い妻かしら。」

人「結婚したときは、若い妻と年をとった妻とどちらが先でしたか。」

女の人「結婚したのは、おじいさん(人相見を茶化していう)のほうが先ですねえ。」

人「お前は変な人だねえ。腹が立つよ。チョット待って。名前は？」

女の人「シティ・ソンドリです。」(ヒンドゥー教の神クリシュナの娘の名、非常な美人で魔力を持つ持ち主)

人「ああ、お前は大変だよ、そんな顔なのにシティ・ソンドリの名を語るとは。お前にぴったりの名はシティ・ソンドリではなく……………」

女の人「じいさんはシティ・ソンドリを知らないの。」

人「お前はシティ・セン Sitisen (Sitisen とは時計のシチズン Citizen のこと) でもいい。」

他「スイティ・ムニガール Siti Munigar (美人の名) でもいい。」

人「あ、それは正解。」

女の人「なんですって。」

他「Siti Munigar。」

女の人「じいさん、そのとおり。」

人「いったいあなたはどっちなんですか。(シティ・ソンドリか、スイティ・ムニガールかをきく)」

女の人「ムガール Megar。」(Munigar から出たことば、Megar は卵がヒナにかえること)

人「正直にいいなさい。お前は何か証明するものを持っていないのか？」

女の人「何か持っていないかですって？」

人「箱をもっていないかい？」

女の人「何のために？」

人「お前の名前が箱に書いてあるんじゃないかい？市役所からもらった証明書は何という証明書だったかねえ。」

他「KTP（カテペ）[身分証明書]です。」

人「そう、それを持っているか、もっていないか。」

女の人「じいさん、絶対になりません。」

人「お前は何を考えているんだい。」

女の人「カテペング Katepeng（ふるい）ですね。」（katepe [身分証明書] と Katepeng [ふるい] とを混同していたことから、笑が生ずる）

人「馬鹿め、KTP は市役所からもらった証明書だよ。」

女の人「アア、写真がついているものですね。」

人「そうです。その写真はカドに貼って、それから上のほうに名前、そして性別、そこに女か男かが書いてあって、それからお前の趣味はなんですか。」

女の人「私の趣味はスポーツ。」

人「どんなスポーツですか。」

女の人「バーベルをあげることです。」

人「神様お許してください。お前は細い体なのにバーベルをあげるとは！」（トントントンの戸をたたく音あり）

女の人「じいさん、細い体でもよく運動したら……………」

人「ああお前はなんのために来ましたか、急いで教えてください。」

女の人「薬をもらいたいのです。」

人「薬をもらいたいだって。」

女の人「急いで、大事な目的です。」

人「ハイ。」

女の人「大事なものは……………」

人「お嬢さん、どういうことですか。」

女の人「年をとった妻を離婚しなさい、私に邪魔にならないように。」

人「ああなるほど、あなたの御主人が、年をとっている妻を離婚するようにしたいのですね。」

女の人「ハイ。」

人「すなわち、お前は主人を一人じめにしたいのですね。」

女の人「一人じめがいいのです。」

人「お前の主人は何という名前。」

女の人「名前ですか。」

人「そう。」

女の人「アルヤ・ドルササナ Arya Dursasana です。」(ワヤン人形の敵役で、助平で、
弓矢の強い英雄、主人をその敵役に見立てている)

人「正しいことを云いなさい。誰だろう。」

女の人「これだ、じいさんこれだ。シティ・ソン Sitison (ボクサーのタイソンのこと)
だ。」

人「神様お許してください。自分の名前をいわず、主人の名前もいわず、ぼくはどのように
して人相を見たらいいのか。」

女の人「主人の名前をいったら、じいさんは断食するでしょう。」(男でも女でも好きな人
ができて、その人を欲しいと思うとき、その相手の誕生日をさぐり、その日に断食する
と、望みがかなうという考え方に基づく)

人「なんのために、あなたの御主人に対して断食するのですか。」

女の人「えっ、さっきじいさんが予見しました。人相見だといったではないですか。」

人「そう、名前は何ですか。私が人相を見ましょう。」

女の人「そう、また断食してお香(お祈りに使うとき樹脂を加工して作った固形物で炭の
上においてたく、その煙が香をはなつ)をたくでしょう。」

人「お香を煮る、あっごめんなさい。お香をたく前に、私はそのお香にお祈りしなければ
いけません。」

女の人「お香を煮るですって、じいさん。」

人「ハイ、なんですか。」

女の人「チェポット Cepto (アストラジンガの別名)と申します。」

人「名前がチェポットですね。チェとはどういう意味ですか。」

女の人「チェチェさんの尻の穴が開かれたりつぼんだり。」(ここは Cepot の語のもつ音
遊びの表現になっている)

人「神様お許してください。チェチェさんはウケン Uken さんの子供ですよ。彼 [Cepot
のこと] の誕生日は何曜日ですか。」

女の人「日曜日、月曜日。」

人「何故二つあるんですか。」

女の人「日曜日の夕方だから日曜日 (A/HAD) でも月曜日 (SE/NEN) でもあるわけ
です。」

人「月日生まれですね (NENHAD と云った)。チェポットの年老いた奥さんはどなたで
すか。」

女の人「イマース Imas という人です。お化けに食べられてもいいような人ですよ。」[ド
ンドン戸をたたく音がする]

人「イマース。」[ドンドンたたく音]

女の人「じいさん、お客さんですよ。」

人「なんですか。放つといてください。人相見がお祈りをはじめていないのですから。」

女の人「じいさんのところへ実際多くお客さんがきますか、それとも普通ですか。」

人「多いよ。今は乾期なので、水を下さい、砂糖水 (Lahang) を下さいと人がやってきます。」

女の人「他の人はあとで、大切にやって下さい。今は先に私のことをやって下さい。」

人「ハイ、私はあなたが可愛そうだから、早く帰れるようにします。私はいつまでもお化けと付き合っていないでください。」

女の人「お化けはどこにいるのですか。」

人「その墓にいます。」

女の人「お墓ですって。埋められたのはじいさんですか。」

人「私はさっきからここにいるよ。耳をすませてよくきいてください。水を持ってききましたか？」

女の人「じいさん、油を持っています。」

人「どんな油ですか。(じいさんは化粧油を期待している)」

女の人「灯油 Kerosin を持っています。」

人「馬鹿な、灯油は何のために？」

女の人「じいさんを燃やすためです。」

人「ああなるほど、お前はここに来たのは、僕を殺すためなんだなあ。ひどいなあ。」

女の人「それじゃあ、どんな油が必要なんですか。教えてください。」

人「おでこ・ロンか、三省堂の香水だよ。(Cologetle-Kolonyon, Brutt-Embrun つまり、有名な香水名を誤った名前という) 何でもいい、オドロナ (Odorono が正しい。語が O で終わりジャワ語的なので、スダ語的に Odorona という) などだよ。」

女の人「ここに油があります。」

人「なんだい？」

女の人「Orowodol です。」(メチャメチャになっている状態)

人「ひどいなあ、開けて、そして洗顔クリームをもっているの、いないの。」

女の人「じいさん、もっているよ。これ。」

人「なんというクリームだね。」

女の人「黄色いクリームです。」

人「なに、なにから出来たものかね。」

女の人「芋 Kuning (クニンという。米などの着色用 (黄) に使われる。芋というよりは茎か。しょうがの根に似たもの) をすりおろした黄色いクリームです。」

人「なるほど、若さを保つためにそれはいいんだよ。それは正しい。」

女の人「じいさん、これ口紅だよ。」

人「口紅だって、これが口紅だって。この口紅の材料は何だね。」

女の人「着色された口紅です。」(もとの口紅は使い切ってしまい、そのあとに着色した芋の練りものを口紅の形にして、口紅として使用している)

人「エッ、なぜクワと同じなのか。(農作業の道具であるクワはひどく摩滅すると、それを鍛冶やにもっていき、摩滅した鉄の上にはがねをカバーしてもらう)着色された口紅なんかあるかなあ。」

女の人「ただ赤くするだけですよ。」

人「そうですか。何で赤くしましたか。」

女の人「じいさん、黙りなさい。早く祈ってください。」

人「ハイ、水のふたを開けて。」

女の人「じいさんが開けてください。」

人「それじゃあ、お前の主人が年老いた妻を離婚するようにして欲しいんだね。」

女の人「年とった妻を離婚して欲しいんです。」

人「そうか。黙って私が祈っている間、しゃべらないでください。お静かに。」

女の人「はあい。」

人「お前の名前はなあに。」

女の人「イジュム Ijem です。」

人「イジュム。」(アラビア語の基本的な祈りをいう、次に古いジャワ語を使って祈る。祈る間に戸をたたく音)

女の人「じいさん、お客さんが来たよ。」

人「お静かに、馬鹿め、静かにしなさい。馬鹿、私の祈っている間、黙っていなさい。」

女の人「あれ、お客さん。お客さんを部屋に入れるんですか、入れないんですか。」

人「放っというて、お祈りがまだ終わっていないんだから。」

女の人「でもお客さんはずっとノックをしていますよ。」

人「馬鹿者め、ここの人相見に来る人で正気な人は一人もいない。これ水。」

女の人「も一度祈るんですか、もう祈らないんですか。」

人「これで十分。繰り返す必要はない。私はただ、ビスミラー Bismillah (神様のおかげでの意) ととなえるだけ……………」

他の女の人「ごめん下さい。」

女イジュム「じいさん、女の声だ。」

人「ああ、しまったなあ。そのお客は誰なのか、男か女かのぞいてくれ。」

女イジュム「女の人です。」

人「誰。」

女イジュム「私の敵です。」

人「エッ。」

女イジュム「私の敵。」

女イマス「ごめん下さい。」

女イジユム「じいさん、そのとおり間違いない。」

人「ああしまった、お前の敵だって？」

女イジユム「イマスが来たのよ。」

人「ほんとうにお前の敵かい。」

女イジユム「ほんとよ。」

人「お前は部屋にかくれてくれ。」

女イジユム「じいさんの部屋ですね。」

人「ハイ、急いで急いで、そこを歩いて行ってください。」

女イジユム「じいさん、絶対にいわないでください。」(戸をたたく音)

人「はい、いわないよ。お前が部屋に入ったら、音をたてないでくれ。絶対にしゃべらな
いでくれ。黙っていてくれよ。」

イジユム「はあい。」

人「そうだよ。」

イジユム「じいさん、絶対にいわないで。」

人「いわないよ、急いでむこうの部屋に行きなさい。そうそう、お前のは頭かくして尻か
くさずだよ。」

イジユム「ああなるほど。」

人「そのカーテンを閉じて。」

イジユム「私は下にいますからじいさん、あなたが閉めてください。」

人「馬鹿な奴だ。私が閉めるよ。ああ間違った。お前の尻が出てしまった。私はカーテン
かと思った。」

イジユム「じいさんがカーテンと思っているのは私の腰のものです。」[腰にまきつけて着
用する一種のスカート]

人「これはなんでとところどころに赤い色があるんですか。」

イジユム「それは Bolonan の時期だからです。」[ほんとうは月のもの Beureum といい
たいのであるが、その語を避けて Bolonan (幼い子供のある期間との意) という]

人「馬鹿だなあ、Bolonan というなんて。」

イジユム「じいさんそれをいわないで、実はそれは土です。赤い土だよ。」

イマス「ごめん下さい。」

人「馬鹿だな、お前はかくれているのだよ。」

イジユム「あっそうか、黙っています。」

人「はあい、そこにじっとしていなさい。」

イマス「なんで戸を開けないのですか。」

イジユム「じいさん、ほんとうにあの人だ。」

人「お嬢さん、お入り下さい。戸は鍵をかけてありませんから。[イジユムに向かって] 静かにしておくれ。かくれているときには絶対にしゃべらないで下さいよ。」(戸をたたく音)

イジユム「イマスだよ。」

人「黙ってくれ。神様お許してください。お化けはかくれているのに、まだしゃべっています [イマス Imas に対して] どうぞお入り下さい。」

イマス「戸を開けて下さい。」

人「鍵をかけていないから入って下さい。」(トントントン再び戸をたたく)

イマス「開きません。」(ドンドン戸をたたく)

人「ああなるほど、鍵をかけてないと思った。」

イマス登場

人「どうぞお入り下さい。」

イマス「私のことをまだ御存じですか？」

人「チョットまって、チョット待って下さい。どなたでしたっけ。」

イマス「まさかお忘れでは……………」

人「はい、どなたですか。」

イマス「よく前のことを考えてください。誰でしょうか。」

人「チョット待って、チョット待って。」

イジユム(小言で)「じいさん、じいさん、絶対いわないで下さい。」

イマス「じいさん、それはなんですか。それはじいさんのラジオの音ですか。」

人「ハイ、それは消していないラジオの音ですよ。」

イマス「じいさん、私をまだ覚えていますか、誰でしょう。」

人「ああ貴女は出目金に似ている人ですね。ようこそいらっしゃいました。イマスさんです。」

イマス「ハイ、イマスです。」

人「ああうれしい。あなたはどなたと御一緒に来られましたか。」

イマス「一人でまいりました。」

人「ああ、お一人ですか。」

イマス「じいさん、ごらんとおりです。」

人「御用は何でしょうか？」

イマス「私はわざわざここに来ましたが、すみません、おこらないで下さい。何も持って参りませんでした。」

人「いいですよ。大事なものは、お金をもってくることです。」

イマス「それは大丈夫です。御安心下さい、おじいさん。そして私は以前、おじいさんが予言したことが当たらないので、予言どおりになるようにしてください。」

人「ハイ、何故ですか。」

イマス「以前、私はなにもかもおじいさんに打ち明けたのをまだ覚えていますか。」

人「ハイ、けれども以前のことはなんだったでしょう。」

イマス「前に、私がいったとおりの主人は助平で、ある女の人にチョコカイを出しました。」

人「誰にですか。」

イマス「まさか、おじいさん。この前私が申しあげましたよ。」

人「ハイ、基本的に大事なものは、あなたの御主人が正しくて、やさしくなるようにすること。いまあなたの御主人は妻が二人かどうか教えてください。」

イマス「二人の妻だったらことわざとどおりに、私も神様が決めたことに対して、従わなければなりません。（「運命に従え」とのことわざあり）決めたことに対して反対はできません。」

人「ハイ、そうです。」

イマス「主人に二人の妻があるということを私は問題にしているのではないのです。主人はえこひいきしすぎです。」

人「えこひいきですって。」

イマス「主人は鈍感な人です。」

人「鈍感だって？」

イマス「片方にだけ片入れしてます。」

人「ああなるほど、片入れしてるんですね。」

イマス「主人は主人として、若い妻と年老いた妻とをどうやって同等にあつかったらいいのか、判断できないのです。」

人「この人は[さっきの人]とはちがってよくしゃべる人だ（ひとり言）イマスさんどこの学校を卒業しましたか。」

イマス「経済専門中学校（SMEP-Sekolah Menengah Ekonomi Pertama）です。」

人「SMEP って何ですか。」

イマス「それは、それはおじいさん、自分で考えて下さい。今は学校のことではなく……」

人「ハイ、大事なものは、あなたの御主人が若い妻を離婚するようにするのかどうかです。」

イマス「若い妻を離婚するように頼む勇氣はございません。というのは愛をこわしたり、縁を切ったりすることと同じで、それは罪悪 [dosa] です。」

人「ハイ、そうですね。」

イマス「今、私がおじいさんに頼むことは、主人が賢くなって、えこひいきをしないで、同じようにして欲しいということですよ。」

人「どなたとですか？」

イマス「どなたですって。」

人「若い奥様のことですね。」

イマス「名前はイジユムです。名前もよく知り、話し合ったこともあり、相談したり、仲良くしている間柄です。」

人「へエッ、イジユムですか。」

イマス「でも [イジユム] の声はおじいさんのラジオの音に似てますね。」

人「あらまあ、私の家は闘う広場に使えるかなあ (ひとり言)。イジユム (と呼ぶ)」

イジユム「じいさん、なあに。」

人「ここへこい。出てこい。」

イジユム「じいさん、かくれているのに。」

人「そうだが。」

イマス「おじいさん、チョット待って、チョット待って、それはラジオではないですね。人間が現れましたよ。」

人「ホラ、こいつはイジユムですよ。あなたの敵ではありませんか。」

イマス「イジユム、お前さんだねえ。ここで何をしていたの。お化け、出ていきなさい。」

イジユム「かくれています。」

イマス (もっと大きい声で)「出ていけ、お化け、出ていけ。」

イジユム「ハイ、チョット待って、ひっぱらないでください。」

イマス (大声で)「お化け、出ていけ。」

イジユム「イマスねえさん、恥ずかしいから大声を出さないでください。」

イマス「出ていけ、出ていけ、出ていけ、出ていけ、出ていけ。」

イジユム「はあい、チョット待って、痛い、痛い、痛い。」(イジユムはおならをする)

イジユム「痛い、はさまれたから。」

イマス「お前はなんでお尻で音楽をするの。」

人「チョット待って、ここで口論はやめてください。いまはお前たちは敵と敵。ここで争わないでください。これじゃ、じいさんの家はつぶれてしまう。」

イマス「おじいさん、たたかっているのではありません。イジユムがここに来たのはなんのためなんですか。」

人「はあい、目的はお前を離婚して欲しい、と。」

イマス「まさか。」

人「[イマスにむかって] あなたの御主人 チェポット君はイマスを離婚しなければならない、ぼくはイジユムに命令されたからです。」

イマス「おじいさんは以前、私を守ったけれども、実際はこのように、私の前では私を守って、私のいないところではイジユムを守る。おじいさんはほんとは正しいかもしれない。けれども人相見として、どこに正しさがあるのでしょうか。」

人「うーん、ぼくはこういう状態だったら、もう立つ瀬がありません。」

イジユム「イマス、いわせて頂戴。」

イジユム「主人が私のところへ行こうとするときに、お前はってはいけない、いけないという。実際にお前は彼の奥さんです。でも私も彼の奥さんなんですよ。」

イマス「えっ、私はいってはいけないとは絶対いわない、けれど……………」

イジユム「私はあなたが禁止する〔主人が私のところに来ることを禁止すること〕のにはどうしても承知できません。」

イマス「ああ、それはお前の主人が馬鹿だから……………」

イジユム「お前のせいだよ。男はあなたが欲しくなくても、お前はまだくっついていく。」

イマス「えっ、くつつくですって。お前がくっついている。」

イジユム「くつつくのはお前。」

イマス「お前がきらいだ。なるほどお前はずっとここにいて、人相見が私を悪くするように願をかけた。」

イジユム「いいえ、私がここに来た目的は、主人が私を愛するように頼んだだけ。」

イマス「お前をも愛するように願ったけれども、私は片方の目でも、もうお前を見たくはない。」

イジユム「それはあたりまえ。主人はあなたにあきましたから。」

人「やめてくれ。今は争ってはいけない。ここで一緒に休みましょう。帰っても、もう夜だから。そしてクボ・ジロ Kebo Jiro (クボ・ジロという音楽の一種、早くて、元気のいいテンポの音楽。Kebo は水牛のこと、Jiro は小屋から逃げること、従って水牛が小屋から解放された状態。つまり、楽しくゆかいな音楽をいう) のカセットをつけて、一緒に聴きましょう。」

(1996年1月16日 受理)